

学力の基礎をきたえ どの子も伸ばす研究会ニュース

NO. 363

学力研の広場

2025. 6. 7

学 力 研 発 行

常任委員長 岸 本 ひとみ

ペイペイ銀行うぐいす支店 普:3607141

「必要ない努力は捨て、結果につながる努力のみを厳選し、集中する」

これは、私が人生で得てきたものを振り返ったときに、やっと明確にすることができた人生訓です。

つまり、多くの人が、

「自分はどうなりたいのか？」

「何を手に入れたいのか？」

ということを考えずに、目の前にきた物事にがむしゃらに努力をしているので、自分の望む方向に人生を動かすことができないのです。

※井上裕之『努力の選び方』（2015 フォレスト出版）より。

目の前にきた物事にがむしゃらに努力している人には、頭が下がります。

ただ、がむしゃらな努力が、成果につながらなかった場合、「努力したけど無駄だった」と思ってしまうかもしれません。みなさんの努力が、自分の望む未来につながれば、「努力したからできた」と思えるでしょう。

今月の特集は、「自信がつく努力のさせ方」です。（荒井）

CONTENTS

◇特集 自信がつく努力のさせ方◇

西洋薬ではなく漢方薬で	加藤英介・・・・・・・・・・	2
努力する行動、心を育てる	宮本 哲・・・・・・・・・・	4
「こつこつ」と取り組む姿勢を身に付けるためにできること	鈴木基久・・・・・・・・・・	7
百マス計算で「努力が成果に結びつく」経験を	吉田雅直・・・・・・・・・・	9
めあてをもって努力する	根無信行・・・・・・・・・・	11
自信がつく努力のさせ方～子どもも、保護者も成長していく～	岸本ひとみ・・・・・・・・・・	13

◇連載◇

「どの子も伸ばす」を本気で考える⑩「意欲格差」に負けない！公立小学校へ	岡本美穂・・・・・・・・・・	15
考える力をつけるための授業の組み立て方⑩ 参観授業で全員参加させる手立て	荒井賢一・・・・・・・・・・	17
社会科（歴史）授業力アップ講座 29 ホンモノを見る	深澤英雄・・・・・・・・・・	19

宮口幸治著『境界知能の子どもたち』（SB新書）の紹介	金井敬之・・・・・・・・・・	21
春の先生のための学校・第3回の報告	福島 尚・・・・・・・・・・	23
局長・常任委員長だより	・・・・・・・・・・	25
学力研カレンダー	・・・・・・・・・・	26

西洋薬ではなく漢方薬で

加藤 英介

はじめに

授業中、次のようなことはないだろうか。

「〇〇が分かる人はいますか。どういこうと説明できる人はいますか。意見を教えてください。」と子どもに尋ねる場面は多くある。しかし、反応するのはごく一部の子ばかり。数人と先生だけで1時間が終わっていることはないだろうか。「意見があるならしゃべろう。ノートに書いてあることでもいいよ」と次の手を打つも絶対に言わない。重たい空気が教室に広がり、「ではだいきさん発表してくれますか。」と聞くと「えー。無理無理」と授業が終わる。

これは、実際に6年生を担任していたときの一場面である。発表することに対して苦手意識、マイナスのイメージが個人にも全体にもあるからである。今回は、自信をもって発表したくなるための仕掛けについて、全体指導と個別指導の2つに絞って紹介する。

全体指導

全体には次のように伝えた。

「みなさんは、学校に何をするために来ていますか。勉強するため、賢くなるため、友達と仲良くするため、など意見が出ましたが、そうだなって思いますか。一日の中で一番多い時間は休み時間ですか。それとも授業ですか。手を挙げましょう。もちろん、授業ですね。では、賢くなれる授業とは、どんな授業ですか。一人だけで黙々と取り組むこと？仲間と取り組むこと？みんなで話し合うこと？そのどれもが、大切ですよ。このクラスのよさは、一人で黙々と取り組むことができることです。でも、それだけで一年間、おえていいのでしょうか。例えば、先生がみなさんに意見を求めるときがありますよね。そのときに、一部の人がだけが参加するクラスがよいのか、みんなが発表できるクラスがよいのか、あなたは

どちらが賢く学べるクラスだと思いますか。頭では正論は理解していても、できないんだなあって思っている人はいませんか。それは、自然なことですよ。なぜなら、今まで6年間積み上げてきたものがあるからです。今まで、発表をして嫌な思いをしたり、悲しいことがあったり、笑ってごまかしたけど、心が傷ついたりしたことはありませんか。本当は発表したい気持ちはあるんだけど……って。今の話を聞いて、経験したことがある人やそうだなあって思う人はいいますか。聞いてくれて、ありがとう。このクラスで、発表するときに茶化したり馬鹿にしたり仲間を悲しませる人はいいますか。いるなら、今全体に向けて宣言してください。見渡す限り誰もいません。そして、先生も許しません。勇気をもって、手を挙げてくれた人。安心して、自分の意見や思っていることを言っていいたいそうです。ぜひ、挑戦していきましょう。」

まずは、自信をもって発表するための全体ルールをつくる。その後、授業を進める中で、いつもは発表していない子が挑戦する瞬間があればすかさずとめて「気付いた

ことがある人はいいますか。今、すごいことが起きました。何かわかりますか。」とその子の勇気を全体に広げる。また、その氣付いた子も発表を苦手としている子であればさらに「勇気の連鎖が続いています。今の話を聞いてくれていた人はいいますか。」とさらに響くように言葉をかける。そして、いつも積極的に発表してくれている子に「いつもだいきさんは、みんなのために頑張って発表してくれているよね。今、たくさん発表してくれたと思うんだけど、どんな気持ちですか」と聞き、仲間のよさにも氣付かせる。こうやって、少しずつではあるが、自信をもつて言える、全体の前でも挑戦する子が増えていく。

個別指導

全体指導が終わった後、そのままにはほもったいない。勇気をもつて挑戦してくれた子や発表はせずとも挑戦しようとしてくれた子に対して、さりげなくほめて、次につながる。授業後にこっそり呼んで「みかさんは、どうして発表してくれたの。手を挙げてくれたとき、胸が熱くなりました。

本当にすごいね。ありがとう。」挑戦しようとしてくれた子には「がくとさんは、発表しようとしてくれてたでしょ。その瞬間、先生は心でがんばれーって叫んでいました。悔しいなって少し思ったら、次はできるようになるから大丈夫。先生もみんなも応援しているから安心して、言えばいいよ。もし、失敗したとしてもフォローするから言いたいことをどんどん伝えてね」と伝えた。毎日流れていく授業の中で、子どもたちの少しの変化に氣付けるかどうかが肝心。その一瞬の行動にどう価値付け、意味付けをするのかは、教師にしかできないことである。自信をつけたために、毎日声を掛ける。掛け続けることで、「やってみてもいいかも」という変化が生まれ、「やれるかも」という魔法がかかり「やる」という自信が生まれるのである。

おわりに

一年間を終えたとき一番の成長を聞くと「発表がたくさんできたこと」と答えてくれる子が多い。中には「今まで、手をあげることはほとんどなかった。だけど、先

生のクラスになって、なんかみんなが発表しているのをみて、自分もやらなきゃって思ってた。緊張したけど、言えたらすっきりした。今思うと、なんでいかなかったのかなって思うくらい。」と話してくれる子もいた。

これまでのことは薬に例えると分かりやすい「かもしれない。頭痛があったとしよう。即効性の高い西洋薬を選べば、治りも早いがリスクも大きいため、再発することが多い。一方、漢方薬は即効性はないが、自然治癒力を高めるため、じわじわと効く。また、そのときの体調によって、さまざまな効用をもつ、複数の生薬を組み合わせることができ、改善を図る。

即効性を求めなくなる場面もあるが、経験上、そのあとの関係はうまくいかない。ゆっくりじっくり先を見据えて、自信をもてるように言葉をかけていくことが、遠いようでも一番の近道である。今年度は、専科のため、3年生から6年生の子どもたちが少しでも自信をもつて取り組めるよう、サポートしていきたい。

努力する行動、心を育てる

大阪教育サークルはやし 宮本哲

「努力のつぼ」

子どもたちとの人間関係が少しずつできはじめ、子どもたちもクラス、先生に慣れ始めたぐらいに「努力のつぼ」の授業をします。私はゴールデンウィークが終わった頃、ちょうど子どもたちの緊張が緩み、忘れ物が増えてきたり、字を丁寧に書けなかったりするときにします。

簡単に「努力のつぼ」の授業を紹介します。

【努力のつぼの授業】
「努力とは、どんな意味か知っていますか？」

・頑張ること ・あきらめない

・ 一生懸命にする
などの意見が出ます。

辞書でもどんな意味かを調べさせます。

【努力】力の限りを尽くすこと。力一杯に
はげむことのような意味が載っています。
言葉の意味がわかったところで

「努力はやればやった分だけできるようになるものだと思いますか？」

子どもたちに自分の意見をノートに書いてもらい人数の確認をします。努力をした分だけできるようになるの方が多いと思います。ここで理由を聞きます。すると子どもたちから以下のような意見が出てきます。
・ 努力したら努力したことに違いはないから、少しずつでもできるようになる。

・ がんばってやっているから、少しずつでもできるようになる。

・ あきらめないでやったから、その分できるようになる。

・ あきらめないでずっとやっていればできるようになる。

少数ではありますが努力してもできないうにならないという意見も出ます。理由を聞くと

・ なんとなくそう思う。

なかなかしっかりした理由を持っていない事が多いです。

子どもの中には“努力はいいものだ”という考えがありますので、“努力すればその分だけ成長しているはずだ”という大前提があるようです。でもこれは本当なのでし
ようか？

ここで自分のことを振り返ってもらいます。逆上がりや二重跳び、跳び箱ができるようになりたいと思って練習したとき、練

習した分だけうまくなっているかを思い出してもらいます。逆上がり、二重跳び、跳び箱などやってもすぐにできないものは、なかなか練習の成果が目に見えないことが実は多いのです。練習をした分だけうまくなるわけではないのです。練習をずっと続け、あるとき急にできるようになることが多いのです。子どもたちに自分のことを振り返らせ、必ずしもやった分だけできるわけではないことに気付かせます。

ここで「努力のつぼ」の話をします。つぼとは水などを溜める入れ物です。子どもたちが（大人も同様ですが）何か始めようとか、今までできなかったことをやろうと思った時に、神様から「努力のつぼ」をもらいます。これは、どんな人もみんなもらいます。そのつぼは、いろいろな大きさがあります。人によって大きさが違います。挑戦する内容によっても大きさが変わります。漢字の小テストで満点を取りたいときは、

小さいつぼかもしれません。逆上がりができるようになりたいときには、少し大きなつぼかもしれません。自分がつぼの中に一生懸命に「努力」を入れていくと、それが少しずつ溜まって、いつか「努力」が溢れるときがきます。それはできなかったことができるようになることです。だから休まずにつぼの中に努力を入れていけば、いつか必ずできる時がくるのです。でも、自分はこんなに頑張っているのに、なぜ結果が出ないのかと思う時もあります。それは、努力のつぼの大きさが分からないし、中が見えないので、努力をどれだけ続けられればいか判断できないからです。あと一日努力すればできるようになる、そんなふうに分かればいいのですが、それは分かりません。ですから、大切なことは諦めないことです。諦めずに、休まずにつぼの中に努力を入れていけば、いつか必ず溢れるときがきます。このことを信じて、何事にもあきらめ

ずに挑戦していくことが大切です。

このような授業をします。そして自分の努力のつぼを小さな画用紙に絵で描き、教室に掲示しておきます。そして誰かが何かできるようになった時は、努力のつぼの方を指差して努力があふれたことをほめます。

「普段の取り組み」

【音読】

物語や説明文、詩や俳句、短歌など国語の教科書に掲載されている文はできるだけたくさん読んで暗唱できるぐらいになってもらいたいと思っています。そこで何度も音読をするために以下のようなことをしています。

まず、題名の横に五円玉の穴の大きさぐらいの○を赤鉛筆で十個書きます。音読を一回したらていねいに赤鉛筆でぬります。授業中、休み時間、給食の待ち時間、家での自主的な音読など読んだらどんどんぬつ

ていきます。一度に全部読めなかった時は、読んだところまで印をつけておきます。次に読み始める時はそこから読んでいきます。○の数は、毎時間の国語の授業の始めに子どもたちに聞いていきます。その時の音読ベストスリーの子どもの名前を黒板に書き、みんなから拍手をもらいます。さらに学級通信にも掲載し家の人にもほめてもらいます。通信に載せるのは、ベストテンぐらいの子どもの名前と回数を載せます。すると、家の人の協力も進みます。

【漢字】

漢字を覚えるには短期記憶を長期記憶にかえなければなりません。だから何度も何度も繰り返し覚えていく必要があります。漢字スキルで学習した後は、空書きを一日に数回出します。すぐに書けない漢字は、長期記憶になつていないので漢字ノートに書いたり、指書きをしたりして自主的に覚

えることを伝えます。そして休み時間や給食の待ち時間に指書きをしたり、漢字ノートに書いたりして覚えている子を見かけるとめちやくちやほめます。漢字の宿題は漢字ノートを一ページ以上書いてくることになっていきます。大半は一ページしか書いてきませんが、一部は数ページ書いてくる子もいます。この子たちもめちやくちやほめます。学級通信にもこのことを載せます。ていねいに書いている子は、ノートの写真を通して載せます。そして漢字の小テストは、ある程度全員が満点をとれるようになった時から、一人ずつ自分の点数をクラスの人たちに伝えます。全員が満点をとれた時は自分たちの努力を拍手でたたえ合います。そしてクラス全員が連続で満点を何回取り続けたかを挑戦します。そうやって個人の努力をクラスの人たちの努力に変えていきます。

「最後に」

人が成長していくには、努力し続けなければなりません。子どもたちが学校で成長するには、努力をし続けることのできる心を少しずつでもつけてやらなければなりません。努力は大切だということを毎日伝え、努力することが当たり前と思う心を育てていくことで努力する行動が習慣になってきます。

努力する行動を習慣化させていけば、努力することも苦ではなくなるはずです。努力を習慣化するために教師、友だち、保護者などが子どもたちをほめていき、その行動を強化してやればいいと思います。

そのために教師ができること。子どもの努力をできるだけ多く見つけてやり、それをどんな形でもいいので強化してやればいいと思います。

「うーうー」と取り組む姿勢を身に付けるためにできること

鈴木基久

私の勤務する学校の合言葉は「にこにこ、ぴんぴん、こつこつ」で、子どもたちにもこの合言葉は浸透している。「にこにこ」が徳、「ぴんぴん」が体、「こつこつ」が知の目標になっている。こつこつと努力を続けることが、学習内容を定着させるためには必要なのは明らかである。だからこそ、こつこつと取り組む姿勢を小学生の間に身に付けることは重要だと思う。小学校教員としてできることについて、自分の考えをまとめてみた。

1 単元テストについて

単元テストは必ず実施日を事前に知らせ、テスト勉強をする時間が確保できるようにしている。学級通信に代わる「週末の家庭学習情報」に

来週実施するテストについての情報を載せ、保護者にもお知らせし、家庭での学習支援が得られるようにしている。

算数では単元の終わりに練習テスト（うそテスト）を実施して、できなかったところを復習してから、本番のテストをするようにしている。

うそテストは、両面同じ問題を印刷する。その理由は、表面のテストで力試しをし、間違えた問題を確認した後で、本当に理解できたかを裏面で確かめるためである。

このように、テストに向けての準備をすることで成果につながり、「できた。うれしいな。次もしっかり準備しよう。」と子どもが思うことが、努力する子になる第一歩だと考えている。

2 保護者の励ましと「学習観」

子どもたちから聞いた話によると、「テストで満点取ったら百円もらえる。」というように、テストの結果でご褒美を与えている保護者が一定数いるようだ。私は、これはよい方法ではないと思っている。なぜなら、「満点は百円だが、95点ならご褒美なし」となると、子どもにとっては満点かどうかすべてとなり、点数にしか関心をもたなくなってしまう。間違えた問題を見直し、理解が不十分だったところを再学習することが大切なのだが、そこがおろそかになってしまう。

保護者には、結果だけでなくテスト勉強を頑張っていたかの過程を褒め、認めるように、懇談会などで話したいと思っている。

最近読んだ『使える！予習と復習の勉強法―自主学習の心理学』には、
・習ったこと同士の関連を考えて覚えることが効果的だ

・成績を上げるには、勉強のやり方

を考えることが大切だ。

・できなかった問題は、答えだけでなく解き方も知りたい。

・間違えることは、その先の学習に生かすための大切な材料だ。

というような「学習観」をもっている学習者ほどよい学び方をしていることが分かったと書かれていた。(学習観と学習方略の関連を調べた高校生を対象にした研究)

・なぜそうなるのか分からなくても、答えがあつていればよい。

というような結果志向ではよい学びはできないので、発達段階に応じて「学習観」についても語っていく必要があると感じている。

3 漢字学習について

学力研では「努力と成果が正比例する課題に取り組ませるとよい。」と言われている。

漢字を苦手になっている子は、学年が上がれば上がるほど下学年の書けない漢字が膨れ上がっていて、なか

なか前向きに取り組む気になれない。場合によっては、「どうせ頑張ってもできないからやりたくない。」といった学習性無力感の状態に陥っている子もいるかもしれない。

漢字が苦手な子が多い場合は、出る問題を示しても良いと思う。この漢字がテストに出るから、これだけは練習してできるようにしておくように伝える。どの子にも事前の準備をさせるのである。テスト勉強の習慣が身に付き、漢字を苦手に行っている子が少なくなってきたら、漢字テストの方法や内容もレベルアップしていくのが良いと思う。

4 地道な取り組みの成果は広がる

昨年度、3学期に3年生の学級で「進級テスト」と称して、漢字の総復習、百ます計算(十・一・x)とA型わり算などに取り組んだ。その後に行った「多層指導モデルMIM」のアセスメントの平均点が3か月で9点も伸びた。短期間でこれほど点

数が伸びた経験はこれまでなかったので驚いた。その要因は、百ます計算で集中力が身に付いたことや、短時間に多くの課題を正確に処理するというスキル、鉛筆で素早く書くスキルが身に付いたためではないかと私は分析している。

最近読んだ『シン読解力』には「認知負荷を科学的な『地道トレーニング』で下げる」とあった。そこには、「支援しすぎると表層的学習にとどまり、長期記憶活動を喪失したり、集中力が欠如したりする。必要なスキルについてはトレーニングで乗り越えられるように親と学校が協力する。」と書かれていた。必要なスキルのトレーニングとは、百ます計算や百問わり算、ひらがなカタカナ50音表など、学力研の実践で取り組んでいることと同じである。百ます計算に集中して取り組んだことで、どの子もきたえられ認知負荷が下がったため、他の課題についても大きな成長が見られたのだと言えるだろう。

百マス計算で「努力が成果に結びつく」経験を

大阪 吉田雅直

努力とは、目標に向かって、自分の成長を信じ、前に進み続けようとする力のことです。努力する力は「見えない学力」のひとつであり、「見える学力」を支えています。また、努力することのよさや値打ちを実感できる子どもたちを育てることは、学級づくりにも大きくかわってきます。それでは、どうすれば「努力する」「努力できる」「努力しようとする」子どもたちを育てることができのでしょうか。「努力することはすばらしい」と何百回言っても、子どもたちには何も伝わりません。子どもたちが努力することのよさに気づき、進んで努力しようとするためには、実際に「努力が成果に結びつく」という経験を積み上げる必要があります。それには、

- ① 最小限の努力で最大限の成果を出す。
- ② 具体的な目標を設定する。
- ③ 自分の成長を実感できるようにする。
- ④ 一定期間、毎日続ける。
- ⑤ 壁を乗り越えるための指導をする。

ということが大切です。ここでは、私が様々な学年で長年取り組んできた「百マス計算」を例に、「努力が成果に結びつく」経験をいかに子どもたちに積み上げさせていくかということについてお話したいと思います。

① 最小限の努力で最大限の成果を出す

あまり努力した経験のない子どもにとつて、たくさん努力しても少しの成果しか得られないような課題は、逆効果です。「こんながんばったのにできるようにならなかった」と、努力することをやめてしまうからです。子どもたちに必要なのは「最小限の努力で最大限の成果を引き出すことができる課題」であり、それが「百マス計算」なのです。百マス計算は、毎日取り組むだけで、どの子も確実にタイムを伸ばしていくことができます。特に、初めてマス計算に取り組む子どもたちの場合、計算力以前に「マス計算」という形式に慣れるという

ことがあるため、ほとんどの場合、一回目と二回目で飛躍的にタイムが伸びるという現象が起きます。これが、子どもたちのやる気に確実に火をつけるのです。しかも、計算が苦手な子ほど、伸び率が大きくなるので、「きのうの自分に勝った」「ベストタイムに勝った」と目を輝かせながら報告にきてくれるようになります。これが子どもたちの「自信」につながり、「やればできる」「努力を続ければ必ず成果につながる」という「確信」へと変わっていくのです。

② 具体的な目標を設定する

努力するためには具体的な目標が必要です。ダイエツトでも、「何キロを切る」といった具体的な目標があり、それに少しずつ近づいていく喜びがあるから、続けることができるのです。百マス計算の目標は、たったひとつ。それは「きのうの自分に勝つ」ということです。「クラスで一番になる」や「〇〇さんに勝つ」というまちがった目標は徹底的に排除します。百マス計算を「友だちとの競争」にしてしまうと、できる子だけが得意になり、苦手な子はますます自信を失い、計算がきらいになってしまいます。クラスの空気もよんでしまい、学級

づくりにもマイナスです。これに対し、百マス計算は「自分との戦い」であり、友だちとの競争には全く意味がないということをしつこく言い続けることで、子どもたちの意識が変わっていきます。友だちのタイムは一切気にならなくなり、「きのうの自分に勝つ」ことだけに集中できるようになるのです。そして、得意な子が一秒縮めようと全力で取り組む間に、苦手な子は一分、二分とどんどんタイムを縮めていくことができるのです。そして、この「学力格差の解消」は、学級づくりにとっても、大いにプラスとなります。

③ 自分の成長を実感できるようにする

「なんとなくできるようになった気がする」という程度の感覚では、子どもたちのやる気スイッチは入りません。自分の成長を実感するためには、子どもたち自身が、具体的な数値で、「伸び」を実感できるようにする必要があります。その点、百マス計算は「タイムの伸び」という具体的な数値で「きのうの自分」や「これまでのベストタイム」からの成長を具体的に示してくれます。しかも、「秒」単位ですので、きのうの自分より一秒でも早くなっていたら、そ

れは「勝ち」であり、「成長」なのです。この「具体的な数値で自分の成長を実感できる」というシステムこそ、百マス計算の最大の利点であるといえます。

④ 一定期間、毎日続ける

自分の成長を実感するためには、一定期間、毎日続けることが必要です。一週間に一度程度の取り組みでは、計算力を伸ばすことはできないからです。また、「やったりやらなかったり」という教師の姿勢は、子どもたちにも「その程度の取り組みなんだな」と伝わってしまい、教師の本気度が見透かされてしまいます。「やる」と決めたからには、何があっても毎日「やる」という姿勢を子どもたちにも示すことで、子どもたちの百マスに取り組む姿勢や、空気が全く変わってきます。ぜひ、一定期間、何があっても続ける覚悟で取り組んでみていただければと思います。

⑤ 壁を乗り越えるための指導をする。

はじめは調子よくタイムを伸ばしていた子どもたちも、しばらくすると、必ず「壁」にぶつかります。毎日ちゃんと努力しているのにタイムが伸びなくなるのです。ここ

で何もしないでおくと、子どもたちはすぐにあきらめやる気を失い、努力をやめてしまいます。しかし、ここでの指導が大切なのです。私は、「高く跳躍するためにはひざをしつかりと曲げ、いったん低くなる必要がある」ことを実演した上で、タイムが伸びなくなったときは「パワーをためている」時期であり、たまったパワーが一気に爆発する瞬間が必ず来るから、ここであきらめたらあかんという話をするようにしています。「きのうの自分に負けた」とくやしがつている子には「今日はパワーをためる日だったんだよ」と声かけをします。これは、適当な作り話でも気休めでもなく、経験に基づく私のリアルな実感です。実際、何日も何日もタイムが伸びなかった子が、ある日突然一気にタイムを伸ばす姿を何度も見てきました。この「壁を乗り越える経験」ができるのも、百マスの魅力だと思っています。百マスで育てた自信は他の学習や学級づくりにも必ず大きなプラスとなります。ぜひ取り組みんでみていただければと思います。

めあてをもって努力する

大阪 根無 信行

一、はじめに

「努力」を辞書（広辞苑）でひいてみました。『目標実現のため、心身を労して努めること。』とありました。いっぽう、自分が親の立場で子どもによく声かけする言葉に「頑張りや」があり、どちらも大差なく「もつと努力しいや」「頑張りが足りんねん」のように使っていました。その「頑張る」の意味を調べると、『①我意を張り通す。②どこまでも忍耐して努力する（広辞苑）。』と書かれていました。

努力＝頑張るではなく、頑張る前に、「努力」があるのだと思いました。

『努力した者にしかわからない』、という言い方もよく耳にします。でも、努力しても分からない事があります。自分は、『努力したあとに伸びたことを実感した者にしかわからない』、がしつくりくるのです。自身は努力が得意ではないのですが、「努力は大事」と思っています。しかし、努力の効果は伝えにくく、できるのは自身の体験で語ることくらいです。そして、努力をして「伸びた」経験があってこそ、や

つと「努力してよかった」と思えるようになるのだと思います。

二、努力を語りにくい時代

近頃、学校でも、スポーツ教室でも、「努力」を語ることでモチベーションを上げることは勧められてはいないです。さらには、努力はさせないことを願う保護者もおられ、保護者からの提案で学校が変えた対応もあります。例えば、連絡帳を毎日書く手間（努力）を省くために、タブレット送信になりました。給食は食べれるものだけ、食べれる量だけにしてください、と言われ、クラスではその子だけ特別とはできず、全体の残食が増えました。また、学校に登校する努力も敬遠され、欠席届けのアプリを通じてメッセージが届き、「親の友達のお誕生日会で寝不足なので休ませます。」「その理由がダメなら欠席理由を“家の都合”にしてください。」と言われました。習い事の時間の連絡のために持たせたスマホで連絡を受け、切らしたティッシュペーパーを届けてくれる親もいます。教員

だってそうです。タブレットのアプリは、自動採点機能があるから業務軽減になるので導入しましょう。通知表の所見や通信だつてAIでも書けますよ。17時には退勤しましょう、努力や頑張りほどほどに、という言葉の影には、家事や帰宅持ち帰り仕事の努力は見せず、見えない状態で隠れているのに、です。

子どもたちの学習や体力づくり、そして仕事は、そんなものなのでしょうか。努力が「よくない」ものとして扱われることもあるように思えます。今高騰している米だつて、苗代づくりからモミまき、田植えをして稲刈りまで、努力をされた方がいるから米が取れ、それが実っているのです。努力によつてこそ得られるものもあると思います。努力は裏切らない、という言い回しがあります。努力と結果が必ずしも一対一で対応しているものと考えなければ、努力の成果はきつとあると思います。

三、努力を楽しむ

努力を続ける、その過程を楽しむにできる人と辛い人もいるが、どちらも同じ努力です。

同じくしている努力をどう感じるかによって、ところが大きいとなると、努力を楽しめ

た方がいいです。

学力研の提唱する「快適な情動」は、努力を辛いものにならない役目を果たしていると思います。こつこつ、丁寧に積み上げる学習を、「楽しく」「快適に」続ける。そんな実践を通して、「努力は裏切らない」と言えたらいいと思います。

努力と、頑張るの違いですが、努力には、具体的な手立て、めあてがあると考えています。そこが、頑張るだけとの差です。何かの目標を達成するために、努力する。その努力は、何をすればいいのか、どのようにどのくらい取り組めばいいのか、それを子どもと一緒に考えてあげたいです。頑張らなくても、努力はできるのです。

例えば、わり算が苦手です。↓では努力しましょう。だけでなく、かけ算の九九に課題が残っているから、そこを解消する努力をしましょう。マス計算を二週間続けましょう。タイムが上がったらその次のステップで、穴あき九九をにチャレンジしましょう。のように、スモールステップで、成果、伸びが見えるようにすると、努力してよかった、と、努力のよさを感じて、前向きに続けられると思います。結果としてわり算の力がついたら、努力のおかげと思えるのではないでしょう。伸びが感じられ

るというのも、努力を肯定できる要因になります。そのために『目標実現のため』のめあてを、段階的に設定することです。長すぎない（子どもに応じた）一定期間で結果が出るものから取り組むのがいいと思います。

マス計算をはじめ、暗唱、なわとびなども努力の効果が出やすい実践だと思います。

四、努力が必要な時期もある？

あくびが出るくらい楽しすぎる授業はどうでしょう。学習塾に通っている児童の中で、学校の授業を通じては伸びた実感がなく、勉強した気がしない、と言った子がいます。今の自分より、少し高いめあての課題（努力を要する課題）をすることで、力がついた感覚、達成感も生まれます。小学校は、そんな時期なのではないでしょうか。

一年生でひらがな・カタカナを身につける。二年生で九九を覚える努力をする。

三年生で九九を使いわり算の努力をする。

辞書引きの活動でたくさんの語句からめあての語句を見つける努力。これは電子辞書の検索と比べて結果には直結しないかもしれせん。でも、関連語や周囲の語句も目にするので言葉に広がりが出るという

力をつけることができます。

こういった学習での努力は、学齢期の子どもたちにとって、めあてをもって努力を計画的にする力につながっていくのではないのでしょうか。

いっぽう、翻訳アプリのある今、小学校からの英語学習に努力をすることが必要なかどうか、どうつながっていくのか実感がわかないまま行われています。努力は、目標実現のための、具体的なめあてがあることで効果的に働くとすれば、小学生の英語を学ぶ、努力の先の目標って、何なのかをはっきりしておかなければ、子どもたちも、「何のための努力だろう」と思ってしまうかねず、英語・努力嫌いになってしまいます。

五、おわりに

学習も、スポーツでも、『努力』はキツイもの、大変なもの、というイメージからめあてをもって、正しくたしかめながら行うものへと捉え直すと、きっと楽しくなると思います。

自信がつく努力のさせ方

子どもも、保護者も成長していく

加印 いろえんぴつ 岸本 ひとみ

「褒めて育てる」の限界

最近の子どもは我慢することへの耐性があまりないように思う。特に「褒めて育てています。」を標榜されている家庭の子どもほど、その傾向が顕著だ。

学校とは、小さな社会である。時には、友だちとの軋轢があり、衝突もあり、自分の思うようにならないことが続く時期もある。そういう時に、自分からの働きかけを何もせず、周りのせいにしてしまう子どもをたくさん見る。褒めて育てることは間違いないが、叱ることと褒めることとのバランスが取れていないのではないだろうか。

少しがんばれば、「できた」「がんばった」「やりきった」という喜びが味わるのに、そこに至る努力を最初の段階で放棄

してしまう子どもが多いのが、最近の傾向である。

集団で努力することを経験させる

とはいえ、努力することなく力がつくわけではないので、低学年時にそれを経験することは大切だ。幸い学力研の実践には、みんなががんばれば何とかなるというものがたくさんある。

1年生。この時期みんなががんばっているのが、「いくつといくつ」と「何でも□チャレンジ」だ。「いくつといくつ」は、説明するまでもないだろう。「2と7で□、9は2と□」という1位数の合成と分解を唱えるものである。

最初は2から始めて、5月末頃にやっと10にたどり着いた。5までの数の場合は、努力することなくスラスラと合格できてい

ても、7、8、9と進むに連れて、うまくいかなくて、泣きだす子どもや、イライラして怒ってしまう子どもが出てくる。毎回「7」が鬼門になっている。「4と3で7」「7は□と4」が難しいのだ。

ここで登場するのが、頼りになるおとなりさんの存在であり、がんばったら盛大に拍手して祝ってくれるクラスの仲間である。合格できなくて、しくしく泣いている友だちに、優しく声をかけている様子だ。

「そんなに泣かなくてもええやん。ぼくかって、昨日10回ぐらい練習したで。聞いたげるから、もう一回やってみようよ。」

「せやで。『7は難しいよ。』って、先生も言うてたやん。もう一回やろう。」

と、励ましている子どもで、泣いている子の周りに人垣ができています。

素直な年令の子どもたちである。困っている友だちを放っておけないのだろう。再度の練習を促されて、何回かやっているうちに、すらすらできるようになっていく。私は、それをそばでこにこして、見てい

るだけである。

最初のハードルは高いが、内容は平易

私の方針は、この「いくつといくつ」では、あえて厳しいぐらいの合格ラインを設けておくこと、である。少し努力すれば、ほぼ全員合格できる学習内容で、努力することを感じさせると、これ以降のさらに難しい内容になった時も、何とかがんばれるようになっていく。

また、励ましたり、いっしょに練習してくれたりする子どもたちは、私が笑顔で見守っているのをわかっているから、次々に声をかけ合うようになる。時には、

「〇〇さんと□□さんは、何て言ったげたの？」

とたずねて、

「すごいね。そんな言い方ができるんやね。」

と、周りの子どもにも広げていくようにしている。

逆に、最初のハードルを下げてしまうと、すぐに全員合格してしまつて、努力の仕方

がわからない子どもが出てしまう。低学年の学級づくりでは、平易なことほど、集団でがんばらせることがポイントになってくる。

そうじの指導でも

ほうきなんて持ったこともない子どもの集団である。最初は、6年生がやってきてせつせとお世話をしてくれて、3週間の見習い期間も終了する頃には、上手にほうきが使えるようになっていたり、ぞうきんがけのコツをつかんでいたりする子どもが出てくる。

先日のクラス会議で、こんな議題が出てきた。子どもたちの考えた解決方法は、

○そうじの時に、上手にできないので、リーダーさんを決めて、順番にする。

だった。それからは、順番にリーダーさんになるので、何やら相談をして、得意な子が苦手な子に、せつせと教えている姿が見られるようになった。

ほうきを持つているだけで、ウロウロしていた子どもも、自分がリーダーになるこ

ともあるので、はりきつてそうじをしている。

「やればできる」経験の積み重ね

努力しないのではなく、努力の仕方を知らないのが子どもであり、イマドキの保護者なのだと考えるように切り替えることがポイントかもしれない。低学年の担任の主な仕事は、日々、コツコツ努力することが後に大きな花を咲かせ、実りを約束することとを、子どもにも保護者にも経験する場を設定することかもしれない。

また、その努力の日々を、学級通信なり、教科通信なりで、クラス全体や保護者に対して発信していくことも大切な仕事になっている。しつこいぐらいのアピール度でいいと思う。一度や二度、サラリと記事にしたぐらいでは、なかなか伝わらない。

学力研の実践を続けていくことが、日々の子どもの成長を保障していることを、手を変え品を変え、知らせていく。それが義務教育の初年度で肝要ではないだろうか。

「意欲格差」に負けない！公立小学校へ

事務局長 岡本 美穂

勉強をしながら、1年目、2年目と過し、何とかうまく授業づくりをし、私なりに良いクラスをつくることができていたのです。それが3年目になって、ちよつと違和感を感じ始めました。クラスがうまくいっていないというわけではないのですが、子供たちの姿が私のイメージするものとズレているように感じたのです。それまで2年間は低学年、中学年を担任しており、いたずらもするけど、子供らしい素直さがあって勉強も一生懸命やるような子供たちでした。それが、3年目に初めて高学年の5年生を担任してみると、思春期にさしかかってくる、「何だか子供らしくないな」「どこか冷めてるな」「授業がおもしろくないのかな?」「私の気持ちが落ち着かなかったのです。」

が開かれたのです。私が恵まれていたのは、そんな話を学力研でしたら、「じゃあ、この会に講師で来ていただいたら、いいやん」と先輩方に言われたことです。そこで、私が事務局になって講師で来ていただいたのですが、それで赤坂先生とのつながりも、書籍からだけではない学びを得ることができました。そこで学んだことによつて、学校でも「ああ、やつぱり教師っていい仕事やな」「高学年も楽しいな」と思うことが増えていくようになったのです。

◆吉永幸司先生を研究会に招く

私は現在、国語を専門としていますが、それはたまたま在籍した学校の研究教科がほとんど国語だったことが大きく関係しています。私の19年間の教師生活の中で、3年間だけ学校の研究教科が算数だったのですが、それ以外は国語だったのです。

そつした学校の研究もありつつ、私自身

が国語の指導をしていく上で最初に力を入れていったのは、ノート指導でした。国語でどんな力がついたかという証拠として(学が本人にとつても、育んだ力を見る教師にとつても)ノートを残していくことが大切だと考え、そこに力を入れたのです。ノートで学びの足跡を残すとともに書く力を育んでいくわけです。ただ最初にノートにこだわると、結局は(写すべき手本としてではなく、ノートの見本となる)板書にもこだわることになります。さらに、その板書になっていくような授業づくりにもこだわっていくことになるわけです。そうやって、ノート指導に力を入れたことをきっかけにして、国語の授業づくりを追究していくことになりました。

ただ、国語のノート指導で書く力がついてくると、子供たちはふり返りにしつかりとした文章を書けるようになるわけで、「じゃあ、算数のノートやふり返りはどうすればよいか」とか、「この教科ならどうすればよいか」と広がっていきます。ですから当初、私自身は国語の指導だけに力を入れていたわけではなかったのです。そつして、

そんなときに上越教育大学の赤坂真二教授の本を読みました。それは「ああ、こんなアプローチの仕方もあるんや」と新しい目

ノート指導を中心に実践を続けてきた7年目くらいの頃に、板書とノート指導に関する書籍を出すお話をいただきました。それは全教科に関するものですが、どうしても学ぶ上で中心となる、国語力の育成について考えていくきっかけになったのです。また書籍化以降、少しずつ国語での原稿依頼もいただくようになり、さらに国語について考える機会が増えていきました。

国語の実践研究をさらに深めていく上で大きかったのは、教師になって10年目に京都女子大学の吉永幸司教授(当時)と出会えたことです。ちょうどその年も国語の研究をしている学校に在籍していたのですが、研究の指導者として招く先生を誰にするかという話になりました。そのときに、「どうせなら吉永先生のような国語の著名な指導者を招きたいよね」という話になったのです。そこで、私が京都女子大学まで行ってお願いをしたところ、「いいですよ」と快く指導を引き受けてくださったのです。吉永先生には、そこから3年間指導をしていただき、また近年も別の在籍校で指導に来ていただき、いろいろなことを学ばせていた

できました。

吉永先生の指導を受けて授業を見ていただと、つたない授業でも本当に小さなところまで目を配ってほめてくださったのです。例えば、「音読がいいですね」とほめていただととても励みになりましたし、そんなふうに子供たちと関わりたいと改めて思えました。あるいは授業中に吉永先生が撮ってくださった写真を見ると、同じ子供の姿を見ているはずなのに、まったく異なったキラキラとした子供の姿が写っているのです。そのように子供を見る目をもちたいとも思いました。

それから、「国語力は人間力」と吉永先生はおっしゃっていますが、国語力はすべての教科の学びにつながるからだから、改めて大事にしようと思うようになりました。例えば、挨拶一つをとっても、それは大事な国語力で、それは人となつがる力だと言われると、「日頃、『挨拶は大事』と分かったようになつたものになっているけれど、改めてそのように言語化されてみると、本当の意味では分かっていなかったな」と思ったのです。

そして、「国語力は国語の授業だけで育むのではなく、日常の生活から育むことが大切だ」と考え、朝の会で子供たちが順番にテーマに沿って話をしていくような取組も始めました。最初は朝ご飯に何を食べたかといった簡単なことから始めて、少しずつ話す力がついてくると、テーマに沿って多様な話をしていくわけです。もちろん朝の会だけでなく、多様な場面で表現する機会を設けることによって、子供たちが表現する力が少しずつついていきました。そうやって日常から育んだ力が授業中にも発揮され、いつそ子供たちの対話の質も高まっていきました。

このように1年目に久保先生、3年目に赤坂先生、10年目に吉永先生といった先生方との出会いに恵まれ、そこから多くの学びを得たと思います。そのほかにも、詳しく話すときりがありませんが、すてきな管理職との出会いも多く、若手の頃から信頼して大きな仕事を任せていただいたり、若手も一緒に学校をつくり上げていくような取組みを体験できたりするなど、本当に人に恵まれていたと思います。

参観授業で全員参加させる手立て

参観の理科授業で音読

先日、土曜参観があった。

月曜の時間割で二、三時間目が参観で、その後、引き渡し訓練となっている。

月曜日の午前中は、六年の理科授業が一時間ずつ四クラスある。

ちょうど六年理科は「動物のからだのはたらき」で消化の所まで学習したので、昨年度も参観で行った「辛いもの甘いもの」の授業をした。（辛いものと甘いものでは、どちらが体にいいか考える授業である。）
ただ、授業の中で必ず一回以上は、教科書は使わせたいので、次の部分を音読させることにした。

「ご飯にふくまれるでんぷんは、口の中で、だ液によって別の物に変化します。」

食べ物が、歯などで細かくされたり、だ液などからだに吸収されやすい養分に変えられたりすることを、消化といいます。

また、だ液のように、食べ物を消化するはたらきをもつ液を、消化液といいます。

口から入った食べ物は、食道、胃、小腸へと運ばれながら、消化液のはたらきによって消化されます。

消化された食べ物の養分は、水とともに、主に小腸で吸収されます。そして、小腸を通る血管から、血液にとり入れられて、全身に運ばれます。

吸収されなかった物は、大腸に運ばれて、さらに水が吸収され、残りは、こう門からふんとしてからだの外に出されます。口からこう門までの食べ物の通り道を、消化管といいます。

小腸で吸収された養分は、血液によって肝臓に運ばれます。肝臓は、運ばれてきた養分の一部を一時的にたくわえ、必要ときに、全身に送り出すはたらきをしています。

教科書（東京書籍）の30～33頁にある文章だ。

参観では、この文章を最初、班で一文交

代読みをさせた。

「せーの！」と班の中で声をかけあつて音読する姿は、実にいいものである。

次に、上記の文章を句読点交代で一人ずつ読ませる。

これは、油断すると、自分の番の時に、どこを読んだらいいか分からなくなるので、適度な緊張感がある。

そして、読む量は、運で決まる。

「口から入った食べ物は、」

「食道、」

「胃、」

「小腸へと運ばれながら、」

「消化液によって消化されます。」

毎回、読み始める子をかえているので、「そして、」や「また、」や「胃、」などに当たる子は、ほっとするとともに物足りなさも感じているようだ。

この後、授業が進めば、音読する文章も増えていく。

が、この単元は覚えなないといけないことが多いので、今後も続けていくつもりだ。

全員参加の参観授業のつくり方

参観授業では、とくに全員参加の授業が求められる。保護者にとっては、我が子がどんな風に学習しているかが一番気になるからだ。

今回の参観授業で、次のような活動を子どもたちは取り組んだことになる。

- ① 班で音読。(二文交代)
- ② 一人で音読(句読点交代)
- ③ 辛いもの・甘いものの発表。
- ④ 辛いもの・甘いものの十面や一面を板書し、発表。

理科室は縦六列の席になっている。

「辛いものを三つノートに書きましょう。」

三列立たせて、一人一つずつ、辛いものを言わせていく。

「同じものを書いていたら手をあげます。」

一人一人の発表に対して、全体に同じものを書いているかどうかで反応させるわけである。

三列の発表が終わった後に、

「まだ出てないものを書いている人？」

数人が立って発表。ただ、この発表は、

三列の発表をちゃんと聞いてないと、発表されたものを言ってしまうことになる。

次に、同じように、甘いものを書かせ、残りの三列に発表させていく。

「辛いものと甘いもの、体にいいのは、どちらでしょうか。」

どちらかを選ばせ、挙手させ、人数を確認してから、ノートに理由を書かせる。

「理由が三つ以上書けたら、黒板に書きに行きましょう。」

理科室には、黒板が前に上下二面、後ろに一面ある。

前の黒板に「辛いもの」と書き、後ろの黒板に「甘いもの」と書き、体にいい理由であれ、体に悪い理由であれ、「辛いもの」に関しては前に、「甘いもの」に関しては後ろの黒板に書かせていった。

この板書は、全員とはいかない。理由がスラスラ書け、かつ積極的な子が板書する。例えば、「辛いもの」には、次の理由が書かれた。(二部だけ紹介。)

1 辛いものは野菜などが入っているから。

2 あせをかいいたら、熱中しようになくなるから。

3 辛いものはカレーとか消化のいいものがあるから。

4 刺激があるのでまあまあ心臓や臓器に悪いと思う。

5 からいものは食べるとしたや体がいたくなる。

これらの理由を読ませる時に、他の子どもたちに、それが+の理由なのか-の理由なのかを判断させたのです。

例えば、1番なら+、2番、3番も+。でも4番、5番は-となる。

こうすることで、板書された個々の理由をクラス全員で、+か-かを判定することとなり、みんなで作っている授業感が生じるのである。

発表と判定の後、+の追加、-の追加がないかを聞き、あれば発表させた。

これを「甘いもの」の板書でもさせた。

全体的に、「甘いもの」の+が多めに出る。

最後に、私が調べた「辛いもの」「甘いもの」の体にいいことや体に悪いことなどを動画も入れながら紹介していく。

原則さえ真似すれば、子どもたち全員が活躍する授業を作ることができるだろう。

ホンモノを見る

学力研常任委員 深沢 英雄

一、旅して教材研究を楽しもう

休みが取れたときにどこに行こうかと考えることがあると思います。学校は、毎日が激務ですから温泉でのんびりするのもし、サイクリングなどの運動をして思いっきり汗を流すのもよいでしょう。

私がおすすめたのが、教科書などに載っている事例地を旅してみることです。「休日まで仕事ですか」と言われそうですが、社会科の教科書などで取り上げられている事例地は特色があり、訪ねてみるとおもしろい発見があります。

歴史の勉強をはじめた頃は、教科書に載っている事例地にほとんど行ったことがありませんでした。行ったことがないのに、子どもには、さも行ったことがあるようにしゃべって授業をしていました。これではいけないと思い現地を訪ねることをスター

トしました。

一人で行くのが不安だったので、友達を誘っていききました。

慣れてきたら一人で行くことも増えてきました。

ある職場では仲良くなった同僚と奈良や京都の歴史探訪をはじめました。転勤しても夏休みに宿泊の旅をするようになりました。その会は、十六年続いています。

二、ホンモノの前に立つ

広場の読者の方も社会科の教科書に出ている歴史の場所に行かれたことがあると思います。自分の目と足を使って見た場所は印象深いと思います。

ホンモノを見ると色々な感情が生まれます。初めて奈良の大仏を見てその大きさに驚いたと思います。その感情こそ歴史の勉強

強にとって一番大切なこと、本来学ぶという行為なのではないかと感じます。

歴史を学ぶ際に、ホンモノを見ることで、教科書や資料だけでは得られない現地の雰囲気やスケール感を体験することができま

す。現地を訪れることで、単なる文字情報以上の深い理解が得られるのです。残されている石碑や復元されたモノを見ることで歴史的な出来事をよりリアルに感じられます。

三、行ってみて落差を感じたこと

実際に現地に行って、これまで思っていたのと違うなど感じたのは、「長篠」に行った時でした。1980年の公開作品『影武者』。そのクライマックスで描かれたシーンが、「長篠の戦い」。果てしない荒野を土煙とともに敵陣へ疾走する武田騎馬隊の荘厳な姿は、これぞ黒澤映画の真骨頂といえるでしょう。膨大な数のエキストラを動員して構成された迫力の実写映像は、まさに圧巻でした。でも行ってみてビックリ。「長篠の戦い」の主戦場となった設楽原は、「原」という地名からは程遠い開けた場所



ではなく南北におよそ2km、東西に平均して200〜300mほどの縦長な平地が広がっていました。その中央を河川（連吾川）が分断する、およそ馬が駆け巡る大平原とは程遠いロケーションでした。相手の顔が見える距離です。思い込みで見ている合戦図屏風をよく見ると敵は近くにいます。それまで武田の騎馬軍団と信長の鉄砲隊の戦いと単純に教えていました。

四. 現地について予習をする

現地での学びを最大限に活用するために、予習が必要です。事前学習をしつかりすることで、現地での体験とが結びつき、歴史の知識と理解が深まります。

(一) 現地に関わる本や資料を読む
行く前に一定の知識を持つことで、現地の全体像がわかり、大切な見学のポイントを見逃すことが少なくなります

(二) フィールドワーク
実際に現地を歩き回り、自分の目で見て感じるものが大切です。建物や風景、地形を観察し、歴史的な背景と結びつけて考え、より理解が深まります。

(三) 現地ガイドの利用
最近では色々な遺跡・城などに現地のボランティアガイドの方がおられます。ネットで最近はすぐに調べることができ、予約します。丁寧に教えてくれます。説明を聞きながら、本で事前に学習したことで分かっていく所を質問するのです。ボランティアの方は尋ねられると喜ばれることが多いです。「問い」を持って質問すると幅広いおもしろい話を聞くことができます。

何を授業目標にし、どのような内容を学ばせ、どのような資料と指導方法を用いて授業を展開すれば子どもが好奇心や追究心をはたらかせながら理解を深め、能力・技能を伸ばしていくことができるのか。教師自身が現地での体験とおして、感性と知性をはたらかせる中で発見することもあります。現地で実物と触れ合う生の体験、そして自分の疑問をボランティアの方や博物館などの専門家に尋ねる中からアイデアが浮かんでくることもあるのです。そこから授業プランを何度も検討し直し、本当に子どものための授業に作っていくことのできるセンスと技能が磨かれていくと感じます。

インターネットは便利で、教材研究も短時間で手軽にできます。YouTubeやネットで動画も写真も手に入ります。それを上手に使うことも大切です。それにプラスして実際に先生自身が現地に立って得た感想や思いを伝えると子どもにリアルに伝わります。

子どもにとって魅力ある社会科の授業が展開するために、教師が一手間かけて教材を足で探す努力をしたいものです。

宮口 幸治著 『境界知能の子どもたち』（S B新書）の紹介

金井 敬之

境界知能とは何か

境界知能とは、IQが「70以上85未満」で、知的障害と平均域のボーダーに当たる領域をいう（70未満は知的障害に該当する）。

境界知能の子どもたちは、特別支援学級に在籍する基準ではなく、通常学級で学んでいる。通常学級で学んではいるが、境界知能の子どもたちは学校の授業にギリギリついていけないかのラインにいる。

得意な授業であればついていけることがあるし、自分が興味のあること、好きなことについての記憶力がよかったりもする。言われたことはだいたいできるが、いつもとやりかたがちがったり、何か問題が起こったときの対処法がわからなかったりして、自分で新たに工夫するのが苦手なこ

とが多いのが特徴である。

そのような特徴があるので、「やればできるのに」「やらないからできない」とやる気がない、努力不足だと思われる。いちばんしんどいのは子ども本人である。

境界知能の子どもたちは、4年生の中に1、2年生がいるようなイメージである。したがって、学習面の困難さだけでなく友だちとのコミュニケーションにも困難さがある。

境界知能の子どもたちは、統計上人口の14%いると言われる。35人学級であれば5人いることになる。

発達障害と知的障害のちがい

発達障害と知的障害も、社会生活を送る上で生きづらさを伴うという共通点があるが、発達障害は、認知機能にでこぼこがあり、得意なことと不得意なことの落差が大

きいのが特徴である。知的障害を伴うことは多くはないが、こだわりや不注意といった行動面、コミュニケーション能力や学習能力など、ある特定の分野に関して困難が生じる。

一方、知的障害は、全体的に発達がゆっくりしているという特徴がある。通常学級の子たちといっしょにしていると、学習の困難さや不注意が見立ち、対人関係に苦労する。発達障害は、昨今注目をされているが、知的障害の認知度はまだまだ低い。境界知能の子どもたちは、学習やコミュニケーションの困難さを見過ごされることがあり、特別支な支援になでつながらないことも多い。

学習の土台の認知機能

境界知能の子どもたちのように、学習にまずきを抱える子たちは、認知機能の働きのどこかに（または複数の箇所に）弱さをもっている可能性がある。

認知機能というのは、記憶、言語理解、注意、知覚、推論・判断の5つからなる。

5つのうちの1つでも弱さがあれば、情報をうまく取り込めないので学習のつまず

きにつながる。

授業についていけない、先生の指示を聞き取れない、計算が苦手、文章が読めない、漢字が覚えられないなどの学習の遅れは、だいたい小学校2、3年に顕在化する。学習内容が難しくなってくる時期と一致する。

認知機能を高めることなく、教科の学習をしての定着やしくい。認知機能が学習の土台なのである。

その認知機能を強化するトレーニングが、宮口氏の考案・開発した「コグトレ」（コグニティブ ファンクションとトレーニングを合わせた略称）である。

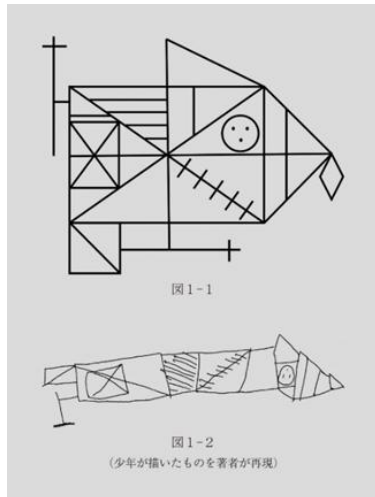
コグトレは、実際の授業場面が想像しやすく、知能検査では判断しにくいその子の学習のクセ（学習の進め方や集中力など）がつかみやすく設計されている。

小学校の朝の5分プログラムに取り入れられて効果を上げている事例や、6年生のクラスでは、学級崩壊の危機から脱し、落ち着いたクラスになったという報告もある。

下の図は「ケーキの切れない非行少年た

ち」にも、本書にも載っている「レイ複雑図形検査」の課題図である。

この図（図1・1）を子どもたちは模写するのであるが、医療少年院の子どもたちは、うまく模写ができない。図1・2のような図になるのを見て、宮口氏は子どもたちがこの世界をこのように見えているのだと実感したという。これは教科の学習以前の問題である。認知機能の重要性を物語っている。



認知機能に課題のある子どもたちは、辛い思いで学校の授業を受けているのだと思う。

いちばんの困りごととは

子どもが学校生活でいちばん大切なのは

「勉強」だと宮口氏は言う。

子どもは、みんなと同じようになりたいと思っっている。みんなの中で自分だけがわかっていないのはとてもつらいと思っっている。多様性の時代だと言われているが、その子のみんなと同じようになりたいという思いや、できないつらさをないがしろにして、大人が多様性という言葉で、子どもたちの発達・成長の機会を奪うことがあつてはならないと言う。

しんどくつらい思いをして学級で机に向かっている35人の中の5人に、もつと手を指し伸ばすこと、手厚い支援をすることが必要だと思う。

おわりに

8月2日（土）の全国フォーラムの記念講演者が宮口氏に決まった。「学校生活でのいちばんの困りごとは勉強である」「みんなと同じようにできるようにになりたい」と子どもは思っっている」という氏の考えは、子どもにも確かな学力をという学力研の思いと一致する。ぜひ、多くの参加者と宮口氏のお話を聞きたいと思う。今から、全国フォーラムが楽しみである。

春の先生のための学校・第3回の報告

福島 尚

講座① 吉田 雅直 先生

「1か月たつての学級づくりはどうする?」

毎日の授業における取り組みに、学級づくりの視点を取り入れるという実践でした。

例えば音読では、朝の時間や給食を食べ終えた子から音読チェックで個人の読み確認する←音読の宿題を真剣にやってくることにつながる←みんなの声が響き合う心地よい音読ができるようになります。音読は学級づくりのバロメーター・・・学級づくりとして音読に取り組むことで、クラスの状態を敏感に感じ取ったり、しんどくなる前に手直しできたりします。

また、漢字指導は一点二画を言語化することで、漢字を覚える作業が知的で楽しい学びの時間になります。みんな得手を動かし、声を出してリズムよく唱える心地よさがあるので、続けて取り組むことで正しい字形や書き順が定着していきます。みんな楽しく、そしてかしくなる時間へと変えることで学級も変化していきます。

講座② 鈴木 基久 先生

「子どもが楽しんで行う日記・作文指導」

作文が楽しくなるためのポイントや取り組みませ方の工夫についての実践でした。

経験不足や定着不足から作文嫌いになっってしまうことがあります。作文指導を日常化させていくことで、書くことのハードルが下がります。その一つの手立てとして【はがき新聞】の用紙が有効的です。二三百文字程度で書けることから、手軽に取り組めます。テーマを自由にすることで苦手意識を持たずに取り組めます。続けて取り組むことで書くことに慣れ、子どもも楽しくなり、書く力も積み上がり、底上げができることで指導しやすくなります。

また、作文の初期指導は4行作文がおすすめです。行事の振り返りや新年の目標など決まったお題を設定し、短い文で、書きたいこと・伝えたいことを自由に書いてよいことにすれば、作文は楽しいものとなります。

講座③ 堀井 克也 先生

「学級会で自治へ」

そもそも、自治とはどういうことか、というところから、自治的な学級づくりの核になる学級会(クラス会議)についての取り組みを紹介してくださいました。

学級会が機能し、学級が自治へ向かうと子どもたちが様々なことに対して主体的になります。そのためには、年間を見通した学級づくりのイメージを担任が持つている必要があります。自治を目指すのであれば、まず聴くことが何より大切であることを教えます。例えば、ペアでの対話や時計回りに全員が発言するなど、一部の人がだけが発言とまらないようにします。そうすることで、クラス会議での発言が活発になります。

また、自分で考えて行動することは良いことであることを教えます。失敗を恐れず挑戦することが大切であることを価値化していきます。このような取り組みを4月・5月にしていくことで自治的な学級へと変化していきます。

講座④ 根無 信行 先生

「保護者とともに子どもをのばす」

①学年・学級通信

ただのお知らせとならないように、どのような子どもに成長してほしいか、担任の思いや大切にしていることを伝えていくことで家庭とつながりやすくなります。

②連絡帳

次の日の予定を書くだけにならないようにスピーチの内容を書くなど、連絡帳の使い方を工夫します。

③初めての参観

特別授業でなくいつも通りの授業で、全員が【活動】しているところを見せるようにします。成長をほめる機会となるように意識します。

④学年・学級懇談会

資料などを提示しながら、学年の特徴を話すようにします。

⑤家庭方問

お互いが安心、前向きにつながることでできる機会と考えます。

講座⑤ 加藤 英介 先生

「自治に向かう！話す聞く指導とは」

話す・聞くことをどのように意識させていくか、具体的な取り組みを紹介してくださいました。

まず、聞くことについてのメリットを感じさせます。中学年であれば、実際に子どもたちに話を一切聞いてもらえない0の状態としつかり聞いてもらえる100の状態を体感させます。そのような体験を通して、聞く姿勢（背筋や視線、足など）を意識させ、聞くことの理想の状態を考えさせます。高学年であれば、授業の中で姿勢を正す意味について考えさせます。そうすることで、なぜそうすべきか考えるようになります。

また、話すことについては、必ず思いは伝わることを実感させていきます。例えば、絵あわせをペアやグループでしたり、みんなと同じ量（30秒）を話すテレビショッピング風のCMを作ったり、誕生日パーティを行うなど、アプローチの仕方は異なりますが、どの学年でも話したくなる仕組みづくりが大切です。

講座⑥ 岸本 ひとみ 先生

「困っている子どもにどう対応する？」

様々な子どもたちにどのような支援をしていくか、具体的な手立てを紹介してくださいました。

多動傾向な場合は物理的な問題を解消することを意識します。例えば、支援に合わせた座席の位置を考えます。

自閉症スペクトラムの場合は、まずこだわりを認め、あらかじめ、クールダウンする場所を決めておきます。人間関係の配慮も必要となってきます。

LD傾向の場合は、苦手な分野の担任を担当が早い段階でつかんでおくことが大切です。また、その子の得意分野を生かした学級経営を行っていくことで、みんなで共に成長する意識が学級の中で芽生えていきます。

授業の中においては、目標を固定するなど、ある程度のパターン化も必要ですが、指導の中で、何が大事なのかを常に意識する。底上げの視点が大切となってきました。そのような意識をもった取り組みが【自己肯定感を育むこと】につながります。

局長だより 6月

○母語が違つ子どもたち

今、とても困っていることがあります。今年は、日本以外にルーツを持つ子どもが2人。しかも、2人の母国が違うのです。兵庫県は多文化共生指導教員というシステムがあつて、週に何度か、その子どもたちの母語が話せる先生がついてくれます。それだけではなかなか追いつかないのが現状です。今は、テストをその先生といつしよできるように、その日に集めています。

○家庭訪問で

保護者の意向では、ほぼ日本で生涯暮らす予定である、とのことだったので、相談した結果、日本語を国語にすることにしました。でも、家庭内の会話がそれぞれの母語なので、語彙の差が歴然とあります。

私のできることは限りがありませんが、授業や他の時間でも、その二人に対しては、正しい日本語をシャワーのように浴びせかけることしかないでしょう。だいたい低

学年では、極力正しい日本語で発言は意識して使わないようにしています。今年は特に気をつけています。私の言葉が、その二人にとっては国語になってしまふからです。

○バイリンガルとセミリンガル

最初は緊張していた二人も、最近は何んかもうできるようになって思わず母語が飛び出して、周りの友だちを煙に巻いていることがあります。私が中に入つて、

「今の言葉□□つて、日本語では何て言いたかつたの？」

と、ポケットを使つて通訳したりしています。

でも、この二人、抽象思考を求められる年令になった時、どちらの言葉で念頭操作をするのかと考えると、心配です。日本では4年生以降、教科書でも抽象言語が多くなつていくのに、それまでに日本語の修得が間に合うのかどうか。どちらの言語も中途半端な、セミリンガルになってしまうのではなにかと思います。

◇事務局だより 岡本 美穂

●夏のフォーラム今年もありま

す！8月2日(土)エルおおさか記念講演 … 宮口幸治氏
「頑張れない子」をどう導くか
基礎学力と認知機能を伸ばす
〜

実践報告

「できる」 「わかる」 「つながらる」でどの子も伸ばす学力づくりと学級づくり
吉田 雅直 (大阪)

1年
学ぶ楽しさを味わい、みんなが高めあう算数の授業づくり
福嶋 尚 (神奈川)

自分の世界を広げる1年生
国語 岸本ひとみ (兵庫)

2年
みんなで伸びる、基礎学力づくり
国語力を高める話す活動とは
橋口佳世 (大阪)

3年
つまずきを減らす3年算数授業
鈴木基久 (静岡)

毎日の積み重ねで自信をもつていく子どもたち大切なことは

何度でも 小川慶子 (愛知)

4年

10歳の壁をみんなと学力で乗り越えよう、算数、
根無信行 (大阪)

みんなが『できた』を増やす学力づくり、国語、
李 詩愛 (大阪)

5年

算数で学力づくりを集団づくり
井川有香子 (大阪)

国語の授業を核に、学力の基礎となる「ことば」を育てる
堀 井克也 (愛知)

6年

子どもの思いにどう応えるか
算数 加藤英介 (愛知)
子どものことばでつくる授業
国語 岡本美穂 (大阪)

中学高校・家庭教育合同分科会

多様性と共生について
学びの多様化学校と日本語指導を通してともに考えよう

内田直 (京都) 小山民子 (京都)

学力研カレンダー

《各地のサークル・部会

2025年 6月

例会、イベント》



どなたでもご参加いただけます。お誘い合わせのうえお越しください。お待ちしております。

※会場等使用状況により、変更の可能性もありますことをご了承ください。

6/

- 21 (土) みなみ学力研 9時半～12時 阿倍野区民センター 図書 nobu580701@yahoo.co.jp
27 (金) 伊丹学力研 18時半～ ※阪急武庫之荘駅近く 前田 090-9715-3830
27 (金) 春日井学力研 18時半～ レディヤン春日井(JR勝川駅) 山口 080-6904-1697
27 (金) いろえんぴつ (加印) 18時半～ なんなん広場会議室 岸本 090-9117-6330
28 (土) 大阪教育サークルはやし 午後 エルおおさか 荒井 aik28501@bca.bai.ne.jp
オンライン開催のサークルには、参加方法を連絡先にお尋ねください。

下記サークルも活動していますので、翌月以降の日程のお尋ね等はこちらでご連絡下さい。

- 持ち方書き方研究会 ライン会議で行います。日時や参加のしかたはこちらでご連絡を 前田 090-9715-3830

《全国キャラバン等 今後の予定》

- 2025 全国フォーラム 8月2日(土) 会場：エルおおさか
記念講演 宮口幸浩氏 (立命館大) 『「頑張れない」子をどう導くか』
～基礎学力と認知機能を伸ばす～
実践報告 吉田 雅直 『「できる」「わかる」「つながる」でどの子ものばす学力づくりと
学級づくり』
分野別講座 低・中・高学年・中高家庭教育

- 1年生講座 第5回 6月28日(土) オンライン

(詳細はメルマガ「まぐまぐ」、「こくちーず」などで)

(講師派遣希望、サークル情報などは 事務局へ 079-426-5133)

※数ヶ月後には、夏休みが始まります。8月2日の全国フォーラム、ぜひご参加ください。また、深澤先生の連載でのお勧め、「教科書の事例地を旅する」のもいかがでしょうか。(荒井)

ご意見・ご感想は下記まで

- 荒井 賢一 E-mail aik28501@bca.bai.ne.jp
李 詩愛 E-mail iwamotoshie@gmail.com
堀井 克也 E-mail katsuya4k1h9@gmail.com
加藤 英介 E-mail hgrtd533@yahoo.co.jp